

感状を授与されるという荣誉に輝きましたが、我が宮本中隊は中隊感状を受けるという偉功に輝きました。

私は衛生兵でありましたので独山一番乗りのもようはよく知りませんが、私が思うのは、その独山の少し手前のところ（地名は忘れまじ）での事です。敵が独山を捨てて逃げる準備をしていたのですが、日本軍の進撃があまりに早かつたものですから、貨車に山砲十四門をはじめ兵器、爆弾、食糧を山のように積んだままの状態で敵は逃げてしまっていました。

我が方はそれをそっくりそのまま頂戴した事は勿論です。そのおびただしい戦利品を獲得したことが中隊感状をいただくことになったのではなかったかなあと私は思っています。

十二月四日の朝、独山を占領したのですが、その日の午後には反転命令が出て、独山をあとに原駐地へ向かいました。

昭和二十年の正月は沙市で迎えました。まるで

狐につままれたような話ですが、衛生兵であった私には関係のない事でした。

## 陸軍新兵よもやま話

愛媛県 村上龍夫

私は愛媛県西条で、大正九（一九二〇）年一月一日生まれ、第一乙種合格です。

昭和十五（一九四〇）年十二月一日、高知市朝倉の歩兵連隊へ現役兵として入営しました。

十一月二十九日夜、神戸港中突堤より高知港行きの客船に乗り、勤務先の三菱海上火災保険神戸支店の皆様のお見送りを受けました。約六十年近い昔のこと、でもはつきり覚えております。誰がどの辺におり、誰がどんな表情であったかと。

タイピストの谷田お姉さんがタバコケースをそっとプレゼントしてくれました。保険会社ではお姉さんにとってもお世話になったのに、その上餞

別まで頂いてと有難いことでした。

船旅も無事高知着。かねて西条町役場より指定の「ともえ旅館」へ行き、町の兵事係中村さん引率の五人と合流、一泊しました。

十二月一日朝、営門前まで中村さんのお見送りを受け、門を通りました。私物といえど奉公袋一個のみ。とにかくハッキリ覚えていないが、白い広いテントの内へ入り、身体検査です。順番を待つうち一〇メートル位左前方で、突然物凄いい罵声が飛び、白い診察衣の軍医が一人の壮丁にピンタ、またピンタ、正視できぬくらい無抵抗の若い壮丁をやっつけています。よく見ると壮丁の左の大腿部に包帯を巻いており、黄色に汚れている。私のとなりのものが「あれは横根（ヨコネという性病の一種）じゃ。徴兵検査の際はキレイな体じゃったろうに！」と説明してくれました。とにかく私はパス。第十中隊第三班へ。左のベッドには谷さんという見るからに人の良さそうな一等兵がいて、言葉短く世話をしてくれました。よい人

にあたって良かったと思いました。

着替える官給品の軍服を見た途端、別世界へ来た実感が切実に感じられました。確かに「人の嫌がる軍隊」へ入り、娑婆とは別の世界だと、否応なく知らされました。でも助かったのは、各寸法がよく体に合っていたことで、「品物に身を合わせ！」というような苦しみはなかったことです。

次は幹部候補生の第一次テストのこと。入営後数日して行なわれました。中隊長、中隊付き将校、初年兵教官と三人の前で口頭試問。中隊長殿より「軍隊へ入ったら、どんな心構えでやるか？」「軍隊は何故困苦欠乏に耐えねばならぬか？」「三八式小銃で射撃をする時、太陽が真上から照っていると……？」とかその他で五問くらい聞かれました。

私は入営前約三カ月くらいの間、軍人勅諭、歩兵操典、作戦要務令等を勉強して、綱領等はすべて丸暗記していました。内心ホイ来た！と躊躇

せずスラスラと綱領の条項を明確に落ち着いて暗誦するように答えました。二日間くらいから中隊長殿の表情がすっかり、嬉しそうになり、掌で机を打って私の答えを喜び、最後には目を細めて将来の努力と幸運を期待する旨のお言葉を頂きました。後で演習の合間の休憩時間に初年兵教官殿より「村上の試問は大隊長第一位だった」と漏らしてくれました。

術科の訓練で弱ったことは、宮庭で高さ三メートルくらいの長さ四メートルくらい、幅一〇〜一五メートルくらいの横木を渡ることでした。高所恐怖症の私は、初めは脚が前へ出ず、もう死ぬぬいでどうやら渡りきったものでした。

内務は一応話に聞いていた程度のピンタくらいであり極端ではなかったのですが、何しろ幹候との理由で「すぐ上官になる奴、今の内にやっておけ」と別に失敗もミスもないのにやられたのは閉口しました。

やがて昭和十六年二月末、中支へ出征。服も靴も毛布もすべて新品を支給され、ただもう命令のままに動くのみでした。坂出より「イタリヤ丸」（六〇〇〇トン）で南京まで、揚子江（長江）の水の色には驚きました。

漢口へ上陸（第三大隊のみ）第十二中隊へ。左腕に「警」と書いた白い腕章を付け、野戦生活が始まりました。田舎でなく大都会で非常に助かりました。第一にマラリアがない。兵舎は煉瓦造りのしっかりした建物、水道、電灯すべてよし、でした。

初年兵の教官は三宮少尉殿。背の高い、脚の長い、涼しい顔をして、男らしさいっぱい、の快男児。ひそかに憧れ尊敬しました。演習は漢水を船で渡り、漢陽です。川岸の高い長い石段は忘れられません。演習は堆土の多い墓地です。野壺がボツボツ見えます。班長さんが大声で「皆良く聞け！ 野壺に落ちんように注意せよ」と。ところが、某日夜間演習の時、ご本人が落ちました。黄

金仏である。臭い臭い汚い汚い。それでも班長さん、こちらは初年兵。いろいろ手分けして武器、装具、被服を各人別に持ちました。兵舎まで遠かったこと、臭かったこと、洗っても洗っても臭いのです。

班長さんといえば幹候隊の班長さん大西軍曹殿、悲運にも教育隊で盲腸炎の経過悪く連隊本部内の病院で不帰の客となりました。幹候生が三人指名されて新仏の当番となり、私もその一人に選ばれました。靈安室に安置しお通夜をしました。ローソクと線香を絶やさぬように隣の控室で三人が番をしました。

何時間たったか山田が靈安室へ入るなりキヤーツと悲鳴をあげて控室へ飛び込んできました。「班長殿がもの言った！」と。三人ともこわごわ白衣に包まれて、両手を胸の上で組ませた班長さんをよく観察しましたが異常がなく、山田がひとり顔色が悪い。後で聞いた話では、人は死後何時間すると、ノドボトケが自然に落ちる。その

時コックンと音がする由。山田はその音を聞いて恐がったものと分かりました。

夜が明けました。雨です。炊事から薪と石油を貰い、急場の焼場を作りました。誰も相談相手はいません。薪を井桁状に積み重ね、毛布にくるんだ班長さんを横たえました。石油を振り掛けて火を付けました。雨天のため煙りは横に広がり周囲に立ちこめました。臭い。腕の関節が内側へ曲がる。腹部の内蔵が最も焼け難い。石油を掛け掛け、タオルをマスクにして竹の先で体をあちこちと転がして焼きました。数日間は異臭が残り、食事もできなかつた思い出があります。

漢口滞在中、夜間よく非常呼集がありました。例えば日本軍が路上を密集隊形で行進中、道路に面した建物より手榴弾を投げられるとか、銃撃されるとか、敵は軍装でなく便衣です。事件発生は警備隊各隊へ非常ベルで知らせます。各隊では週番が「非常！ 非常！」と大声で知らせます。すぐさま軍装、着剣して兵舎前に早い者より整列し

ます。ある程度集まると駆け足で出発、現場へ急行します。

現場周辺の搜索、検問を実施します。初年兵は必ず古年次兵と三人一組で行動します。私のいる間は格別の成果もありませんでした。その他車站分哨、旅団司令部衛兵等の勤務にもよく服しました。

初夏のころ宮様がご来観になるということで沿道警備がありました。飛行場から宿舍までの道路の両側の五〇メートル間隔に着剣銃を横に持ち、鉄帽を被り歩道に向けて車道に尻を向けて道路警備をします。何の変哲もありません。状況終わりで集合、帰隊しました。

この沿道警備の時のことです。初夏の夕暮れ近く、私はちょうど沿道の中山公園の入口付近に立哨中でした。支那娘が三々五々、洋車（ヤンチヨ）や馬車（マーチヨ）で公園へ夕涼みに来ます。日本でも流行のパーマネント頭（後ろから見

ると水菜頭である）をして涼げな支那の夏服を着て、見るからに平和を樂しむ好風景です。目の保養になりました。

また初年兵教育係の助手の私たちの担当に兵長さんがいました。ある夜、数人の初年兵に支那服、支那帽、拳銃を衣の下に隠し、支那靴を履いて、兵長殿のお供をして夜間巡察に出ました。昼間軍服で通い馴れない所を、いろいろ見せて貰い、解説してもらい、喜んで帰隊しました。しかし、それからが大変。南京の下士候隊卒業の新品伍長の週番下士官殿にとつつかまり、いまにもピントの一步手前、命の綱と頼む兵長さんが現われ、週番の伍長に「わしが連れて行つた。お前文句あるか」で終わりました。階級は下でも年次が古い、軍隊とは不思議なところですよ。

そのうち大冶の連隊本部へ幹候受検にと第十一及び第十二中隊より約十人が漢口より乗船しました。船中は全員初年兵同士の心安さ、支那酒を求めては気焰を上げる豪傑も出て、和氣藹々、正に

初年兵天国でしたが、そこまででした。やがて下船用意となりました。さあ大変、酒を飲み過ぎて脚の立たぬ者が数人出る始末。支那酒知識の不足か、天罰か、両側より抱え上げてどうにか下船し、トラック輸送で連隊本部へ行きました。そこで一泊、やれやれでしたが、後々まで崇ったことでした。

内地での口頭試問のせいかな晴れて合格、一応は中隊へ帰り、再び連隊本部の幹候教育隊へ行きました。中支の炎天下を昼も夜も走り回り、途中腹を壊して白いのり状の大便になる異常事態も何とか乗り切り、甲幹合格となりました。乙幹に落ちた者は残念涙にくれながら原中隊へ帰りました。人生の競争は厳しいという姿でした。

新しく陸士第五十四期新卒の連隊旗手の新品少尉殿が新しい教官となりました。前の第五十三期の教官は中隊長として駐屯地へ行きました。九月半ば、連隊長、師団長へ申告をして内地の久留米

へ行きました。十月一日第一陸軍予備士官学校第三中隊第二区隊へ入校しました。久留米在校中は二回学校を出て広い演習場の廠舎で、一回につき約七〇日くらいの野外教育がありました。この二回共それぞれ特筆すべき不祥事が起きました。

第一回目。場所は九州大分由布院北方山中の廠舎のある所。土質は火山灰のためか真っ黒です。雨が降ると服も靴も真っ黒のどろどろになります。廠舎は細長い建物で、中央に通路があり、数箇所にある囲炉裏は木炭を使って保温するようになっていきます。濡れた靴は囲炉裏端へ四方に何列にも並べて乾かします。不寝番が必ず火に近い靴を順次後ろへ下げ、後ろの靴はまた順に火に近い所へ移し全体を乾燥させるのです。しかし不寝番が昼間の疲れで眠ってしまい、火に近い靴を移動させなかつたため焦げてしまい、朝起床して大騒ぎになりました。

昨夜の不寝番を集めて調べた結果犯人が判明し

ました。区隊長より大目玉です。それだけでは相済まず、帰隊後一室で謹慎、軍人勅諭を清書すること一週間という処罰でした。

第二回目はもつと重大事件でした。実弾射撃場でのことです。通常射撃場の四周に警戒兵を二人一組で配置することになっています。第三中隊には第四十師団出身の私たちと、もうひとつ別に第〇〇師団出身者がいました。その警戒兵の一組に第〇〇師団出身者がいました、時は三月の初めでした。広い丘陵地帯で一面の荒い芝生です。二人の警戒兵は、あろうことか小銃を手放し、防寒外套の頭巾を被り軍手を両手にはめて日当たりの良い斜面に寝そべり、煙草をすって雑談していたそうです。そこへ運悪く隣の第四中隊の中隊長さんが通りかかり、二人を見つけて叱り付け、氏名を聞き出し、ご丁寧にも書面で第三中隊長と学校本部当局へ通報したとのことです。警戒兵が軍律に背いて、

銃を手放し

外套の頭巾を被り

手袋をはめ

日だまりに寝そべり

煙草を吸っていた

とはもつてのほかのこと。即日、退校、降等（幹候生の軍曹から平の一等兵に階級が降ろされる）、関西方面の原隊へ中隊付きの下士官がそれぞれ一人に一人が付き添って送り帰したとのことでした。

それより約一カ月足らずの先に、幹候生は三月三十一日付きでめでたく卒業、見習士官となり、日本刀を吊り、勇躍任地へ出発しました。年末には少尉任官を果たし、下級将校として各激戦地で奮闘したのです。その後二人のことは聞きませ

ん。  
かくしてひ弱い新兵もだんだんと、徐々に軍人として成長していくのです。